

令和6年度
すくわくプログラム活動報告書
(実施対象：4～5歳児クラス)

モニカ都立大園



テーマ

光と影

設定理由

4月に子どもたちがプラネタリウムづくりを楽しんでいた（段ボールにアルミホイルを貼り、そこに穴をあけ下から光を当てて遊ぶ）。そこで、光の性質に気付き、性質を活かした遊びに繋がれたらいいと思い、光の活動を始めた。その中で、光には影が関係していることに気付いたため、光と影にはどのような関係性があるか、光とはどのようなものがあるのかを経験の中から気付いてほしいと思い、この活動を始めた。

対象クラス

4～5歳児クラス・27名

活動の狙い

光と影の関係を知る

キーワード

「どんな光を知っている？」

活動期間

令和6年7月～令和6年10月

活動回数

計4回

活動①

好きな光を描く

実施日

令和6年7月8日

活動内容

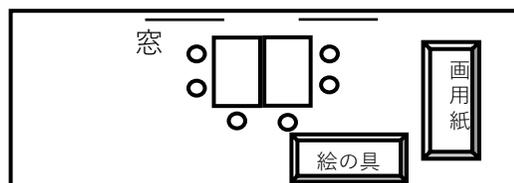
画用紙に絵の具で描く

準備物

白と黒の画用紙 | 絵の具パレット
色を混ぜるためのパレット
バケツ | 水拭きタオル
筆(大、中、小の太さのもの)
机(2台) | 椅子(6脚)

環境構成

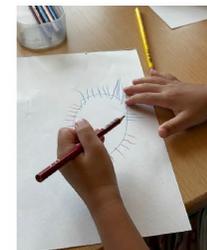
室内で行い、机2台をつけて大きなテーブルに。4～5人程度で行う。テラス窓の前窓を開け、光が感じられる環境で行う。



活動① 好きな光を描く

R6.7.8

・自分の好きな光を描く



「どんな光を知っている？」という問いかけに、「でんきのひかり」「おりょうりするときのひ」「かみなり」「かいちゅうでんとう」「はたる」など光に関する異なる視点を言葉にする子どもたち。経験や心に残る記憶をもとにしたり、友だちの発言からインスパイアされたり。そこから、「好きな光を描く」ことにした。



「たいようのひかりはまぶしい、光が反射しているから。あかだめちゃあつ。オレンジはふつう。ひかりがそこらじゅうにひかる、せかいのぜんぶにひかる。」

にほんだけのせかいじゅう。にほんとアメリカのおでんきがちがうから。」



はなび。3さいのときアメリカで見た。よるにみた。ながれぼし。みたときドキドキした。ママとパパとあっちゃんといっちゃんで見えた。

描くことによって、子どもたちの考えを可視化し、視点を知ることができた。子どもたちは「この絵について教えてくれる？」と問いかけられると、表情が明るくなり、生き生きと自分の描いた絵について話す様子が見られた。子どもにとって自分の表現を知ってもらえる、認めてもらえる経験になり、喜びに繋がったのだと思う。子どもたちの思考、考えに寄り添うプロセスを大切にしていきたい。

活動②

暗闇の中で光を操る

実施日

令和6年8月5日

活動内容

懐中電灯の光を動かして遊ぶ

準備物

懐中電灯 | 筒(2種類の太さ)
木のブロック | 水入り透明ボトル
セロテープの芯

環境構成

ホールの窓に暗幕をつけ、部屋を暗くする。段ボールスクリーン(光を通さない)、凸凹段ボールスクリーン(光を通す)を設置する。



▼ドキュメンテーション

活動② 暗闇の中で光を操る

R6.8.5

・「懐中電灯の動き」によってできる様々なひかりの現象の発見



「ホタルみたい」

「(素材によって) 光を通すものと
通さないものがある」



「コーヒーカップみたい」

自分で光を操る中で様々な発見をしていく。光を動かし、操ることで見えてくる光と影の不思議さ。友だちの光を追いかけたり重ね合わせたりと、一人ひとりの遊びからみんなで合わせた遊びに発展する姿も見られた。

この活動の中で、光の現象として「光と距離と動きによっての影の大きさや移動」「素材の工夫によって創造的な影作り」「2つ以上の光による影の現象」という3つの要素に気づき、経験した。

子どもたちの発見の言葉を一つ一つ聞き、「ほんとうだね」と共感したり、「どうしたらそうなったの?」と疑問を持ったり、「面白いね」と一緒に面白がったり。

子どもと一緒に発見を楽しみ、面白がり、不思議がる。そこから、子どもたちはより光の世界に魅了され、もっと知りたい、もっとやってみたくて興味が広がる。子どもと一緒に目の前の現象を楽しむ心を持つ大切さを知った。

活動③

固定された3つの光に魅了されて

実施日

令和6年9月2日

活動内容

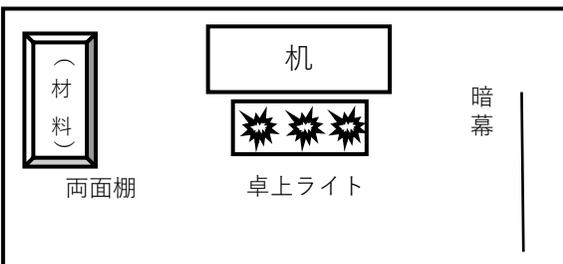
ライトを点けたり消したりして影をみる

準備物

卓上ライト3つ | 筒
テープの芯 | 網かご | 透明容器

環境構成

ホールで暗めの空間。卓上ライトを順番に点け、影の状況が変わる姿を見る。自分の影が映らないようにライトを配置する。机、壁は白い模造紙を貼っておく。



▼ドキュメンテーション

活動③ 固定された3つの光に魅了されて

R6.9.2

・固定された光がついたり消えたりすることによってできる影の不思議さ・面白さを味わう。

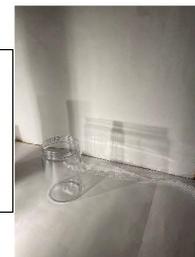


芯を置き、ライトが3つついている状態

- ・「影が3つ出来ている」影の数
- ・「真ん中の影が濃くて、右と左は薄い」影の濃さ
- ・「影が重なっているところが濃くなる」影の濃さ、影の重なり

ライトの前に透明な入れ物を置き、左右のライトをつける

- ・「置くものでできる影がちがう」素材と影の関係
- ・「影が透けているみたい」影の濃さ
- ・「真ん中の重なってるところはペットボトルみたい」偶発の発見、影の重なり



ライトの近くに、木の素材を置く。

- ・「あっち（奥）にいくと、どんだん影が太って見える」影の大きさ
- ・「物を置く場所でできる影がちがう」光と影の関係

固定された3つの卓上ライトと素材の組み合わせることで、光と影との複雑さが増した。それらが織りなす美しさや不思議さに魅了されていく。子どもたちは起こる現象に対し仮説を立て、試し、確認を繰り返すことで光の現象の不思議さを楽しみながら、知識を構築していった。

活動中「どうしたらそうなったの?」「もう一回やってみて」などと子どもたちに問いかけていく。答えを与えるのではなく、気づいたこと・気づいてないことへの問い。子どもたちは再び手を動かし、確認をし始める。“やってみたら偶然こうなった”という発見は、単なる驚きに留まらず、発見の再認識へと繋がっていった。

活動④

ミニシアターで物語る

実施日

令和6年10月17日

活動内容

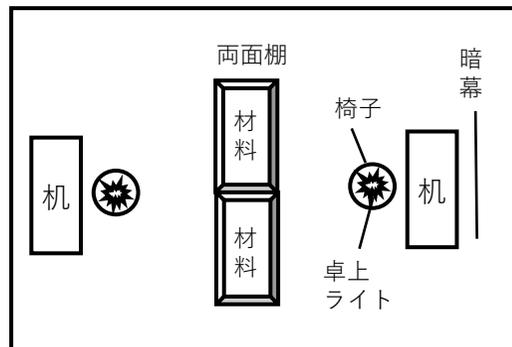
シアターに色と時間の世界を映し出す

準備物

カラーセロファン | カラーカップ
色のついたストロー | オーガンジー
筒 | レース | ざる | 網 | 木の丸太

環境構成

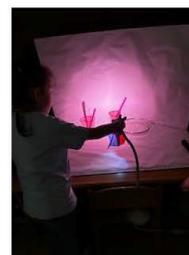
ホールで暗めの空間。ミニシアター2つ（オーバル型、箱型）を壁側に設定し、子どもたちが背合わせになるように行う。真ん中に素材置き場をおくことで、素材を取りに行く際に、互いの世界観を意識できるようにする。



活動④ シアターに色と時間の世界を映し出す

R6.10.17

・ミニシアターを用いて、自分の世界観を表現することを楽しむ。



赤のカラーボリを卓上ライトに当てると「夕方みたい!」と色から時空が生まれた。影の形と手元にある素材とを見比べて、積み重ねていくと…

「え! なんかきれい!」
『なんかびーって(影の中に)光がある』
「東京タワー! 夕方の東京タワーみたい!」

光の向こう側の世界に東京タワーが偶然現れ、赤い光も要素に加わり夕方の東京タワーになった。

前回の活動での白黒だった世界に、色という要素を組み合わせると深海、水の世界などの色だけの発想だけでなく、夕方、夕焼け、朝、夜などの時間帯という概念も生まれた。

ミニシアターの中では様々な物語が創造されていく。

活動中、素材を試行錯誤しながら組み立てていくなかで、素材のバランスが崩れ、倒れてしまうことがあった。その崩れた素材が作り出す影を見たAは、「テントみたいだね」と言った。Bは、自分が作ったものが崩れてしまったと落ち込む姿が見られたが、その言葉で「ほんとうだ!」と表情が明るくなり再び素材に手を伸ばし表現を楽しんでいた。そこには、偶然の発見、出会いから始まるストーリーがあった。

使用物

絵の具パレット | 筆 | 画用紙 | 和紙(ロール紙) | ミニシアター | 懐中電灯 | 筒木のブロック | 透明ボトル | テープの芯 | 卓上ライト | 網かご | レース
カラーセロファン | カラーカップ | 色のついたストロー | オーガンジー | ざる

テーマ：光と影

全体の振り返り

光の活動を始めてみると、子どもたちの中で光と影が同時に存在していることや、光について動きの特徴を表していることに気付いた。

また、発見や学びを振り返り仲間と分かち合うことが、新たなものの見方を楽しむ姿勢や喜びにとって大切なプロセスであることを感じた。思考と行動を行き来する子どもたちの学びがより深まるよう、

今の子どもたちの姿を捉え、職員同士で対話を重ねていきたい。また、セットアップにもこだわりを持ちながら空間を作り出し、探求に役立てていきたいと思う。

終



株式会社モニカ

〒105-0004
東京都港区新橋2-12-16 明和ビル7階
TEL:03-6661-2466
FAX:03-6661-2467

モニカ都立大園

〒152-0034
東京都目黒区緑が丘1-2-14
TEL:03-5726-9145
FAX:03-5726-9146